

春風秋霜

8月号

令和元年8月1日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 夏休みの過ごし方について

私の教員時代には、一般の方から「教員には夏休みがあつていいですね」とよく言われました。一般の皆様には、子供が夏休みの間は、教員も夏休みと思われていたからです。夏休みには研修や出張、部活動があり、夏季休暇や年休をとらなければ休むことができないと知られていなかったためです。また、夏季休暇の届けを出しながらも、学校で仕事をしている教員がいることなど、知っている方はいなかったと思います。

近年、働き方改革が叫ばれ、教員のブラック勤務が話題になっています。部活動のガイドラインもでき、活動日も適切になってきました。また、総合教育会議を受け、昨年度から夏休みの3日間が閉庁日になり、休暇の申請がしやすくなりました。上手に休暇を取り、リフレッシュに努めていただきたいと思います。

2 校長の評価面談を終えて

校長との面談から、各学校が1学期の運営を確実にやっていることを確認でき、大変うれしく思っています。私は、学校経営の視点として「笑顔・やりがい・仲間」を大切にしたいと思っておりましたが、今回の面談において「働きがい」や「教職員間のコミュニケーション」といった話が多く校長から聞くことができ、ありがたいと思いました。

内外教育に大阪大学大学院小野田正利教授が書かれた「白いテーブル」という記事があります。これは、新任教員Sさんが保護者対応に悩み、うつ病となり自殺した事件を取り上げた記事です。

この教員の勤務していた学校では、職員室に白いテーブルが置かれ、職員の憩いの場となり、インフォーマルな話し合いや同僚性を高める場でもあったものの、フォーマルな会議を大事にするという方針の中で撤去されてしまいます。そんな時、気軽に相談する相手もなく、支援も十分に受けられなかったSさんは自らの命を絶ってしまいます。

チーム学校として、ケース会議が定着し、組織で動くことが定着してきましたが、フォーマルな会議だけでなく、一見無駄話と思われる会話が同僚性を高めていることを忘れてはならないと思います。市内の複数の学校で1学期の終業式の日、数種類のカレーで食事会が開かれていることなどは、同僚性を高めることになっていると思います。内外教育(7月19日号)では、様々な取り組みが紹介されています。同僚性は、職員の孤立化を防ぐだけでなく、教育の話題が日常化し、やりがいにもつながる大切なことだと思います。

教職員人事評価において作成する自己目標シートは、学校経営目標を基に自己目標を設定します。自己目標は、数値目標や具体的な子供の姿で記載することになっています。数値目標については、数値のもつ落とし穴にも注意が必要です。例えば、授業が分かるという目標において、集計結果の数値が高くても安心はできません。少数でも分からないと回答した子供がいるからです。また、全ての教科が分かるという回答しているとは限りません。数値のもつ意味を多面的に検討し、個に応じた指導につなげていただきたいと思います。

3 地域の教育力の活用を

夏休みは様々な体験ができる機会です。私も中学生の頃、御前崎の海中で熱帯魚のような青い魚の群れを見た感動は忘れられません。以前、おおるりで行われたイベントで、アメリカザリガニを捕まえることに成功し、緊張しながらも笑顔の子供を見たことがあります。この子にとってはこの体験が小さくても自信になったと思います。

夏休みには、公民館や博物館だけでなく、地域でも様々なイベントが催されます。そのようなイベントに参加する中で学ぶことは多いと思います。体験型のイベントだけでなく、ボランティアとして参加するものもあると思います。昨年度の全国学力・学習状況調査の結果では、ボランティアへの参加が全国平均よりも低い結果となっています。各学校・学級において、参加できるものを積極的に子供たちへ紹介していただきたいと思います。

また、夏休み終了後にその体験を価値付けることも大切にして欲しいと思います。その価値付けによって自己肯定感が高まったり、更なる挑戦につながったりする子もいるはずです。

4 ある教頭先生との会話から

「一人の先生と授業について話をすると、周りの先生方が聞き耳を立てている」という話を、ある教頭先生から聞きました。叱られたり、指導されたりしないために聞き耳を立てるのではなく、日常的に自分の授業を改善しよう意識している職員が多いということです。そのため、この学校では授業改善について指摘されても嫌な顔をする教員がいないとも聞きました。研究授業だけが研修ではなく、『研修の日常化』が大切だと思います。

肘かけ椅子

秋田 美八子 教育委員

『親になるとは』

子育てをする中で、大きな壁にぶつかることが何度もありました。その度に、子育てに関する本を読んだり、周りの人に相談したりして、乗り越えるヒントや術を得ようとするのですが、なかなかうまくいかず、「親としてどうしたらいいんだろう?」「いったい親ってなんだろう?」と、もやもやした思いが心の中で日々膨らんでいった時期がありました。

そんな時に出合ったのが、和歌山県教育委員会から出されていた家庭教育学習資料の中にあつた文章でした。そこには、「親になるとは」として、次のことが挙げられていました。

- ・ 一つ目は、我が子の個性・特質を、日々の子供の様々なできごと、エピソードから把握すること
 - ・ 二つ目には、我が子の個性・特質を理解する中で、我が子の扱い方、付き合い方を習得していくこと
 - ・ 三つ目には、子供の成長に伴って生ずるトラブルに付き合う決意と覚悟をすること
 - ・ 四つ目には、自己及び家族の弱点と利点を認識し、弱点を支えてくれる人間関係を築くこと
- (資料より抜粋)

親としてどこを目指したらいいかを見つけたように思え、少し気持ちが楽になりました。目の前の子供と日々向き合い、悩みながら周りの人の助けや智恵をお借りして、だんだん親になっていく。それでいいのかもしれないと感じている今日この頃です。